

I 旧開拓使別海缶詰所

1. 沿革

北海道野付郡別海町本別海 1 番地 93、同 205 に所在する別海漁業協同組合の倉庫に、開拓使別海缶詰所の一部が遺残する。同缶詰所は 1878(明治 11)年に開拓使が設置した官営の缶詰所であり、その設置目的の主たるところは、当地での優等な水産資源を活かした和人の定着と外貨獲得にあった。設置に当たっては、先進的な缶詰製造技術を日本に導入するため開拓使がアメリカから招聘していたトリート(Upham Stowers Treat)らが指導役を担った。開拓使が設置した缶詰所には、別海の他に石狩、美々(苫小牧)、厚岸、紗那(択捉)などがあるが、別海缶詰所は石狩缶詰所に次ぐ開業である。このため同缶詰所は根室地方の近代的水産加工業の先駆けと言われている。

1882 年に開拓使が廃止され、札幌県、函館県、根室県の所謂三県時代に入ると、缶詰所は農商務省の管轄に移った。そして翌 1883 年に北海道事業管理局が設置されるや同根室農工事務所の管轄下に置かれた。次いで 1886 年に三県が廃止されて北海道庁が設置されると、各官営缶詰工場は民間に払い下げられるか貸し下げられることになり、別海缶詰所は 1887 年に開所当初より関係の深かった藤野家に払い下げられ、藤野別海缶詰所として缶詰の製造が続けられることとなった(注記 1)。

時代が昭和に入ると、鮭鱒の不漁、カニ缶詰の全盛、缶詰製造の中心が北海道沿岸から千島・カムチャッカ方面に移ったことなどから、別海での缶詰製造業は衰退していき、藤野別海缶詰所も 1934(昭和 9)年頃に廃止されるに至った。その廃止から 2 年後の 1936 年に新たに同工場を引き継ぐもの(注記 2)が現れるも、太平洋戦争の最中 1942 年頃に閉鎖され、残された建築群は缶詰所としての役割を終えることとなった。

太平洋戦争が終結すると、旧開拓使別海缶詰所は学校への用途変更という新たな転機を迎える。戦後、日本で新学制が始まると新制中学校が各地に開校されることになるが、別海村(当時)では 1947 年に別海中学校が開校。当初は別海小学校に併置されていたが、独立校舎とする必要性から同年缶詰所を所有する藤野産業株式会社(東京都)と別海村との間に貸借契約が交わされ、旧開拓使別海缶詰所は校舎としての改修を受け 1948 年より供用開始。1960 年に新校舎が完成するまでの約 12 年間、別海中学校々舎としての歴史を歩むこととなった(注記 3)。

校舎としての役割を終えた缶詰所は、別海漁業協同組合の所有となり、同組合の仮事務所や倉庫として利用されるようになり現在に至る。旧開拓使別海缶詰所は缶詰工場として建設されてからこの方、様々な減築や増改築を受け、大きくその姿を変えてきた。その一方で、別海町に現存する最古の木造建造物であると同時に、開拓使が設置した缶詰所の中で唯一現存するきわめて貴重な産業遺産として位置付けられており、2013(平成 25)年には別海町の歴史文化遺産に登録された。

なお、旧開拓使別海缶詰所に関する既往研究としては、戸田博史「★開拓使別海缶詰所」(北海道大学大学文書館年報, 3, pp. 43-87, 2008)がある。同文書館はこの論文について「開拓使が重要な事業として位置づけていた缶詰製造業の全貌について、極めて詳細に調査した論文である。」と高く評価している(以下「戸田論文」に略す)。本章の缶詰所に関する沿革はこの「戸田論文」を参考にまとめた。

注記

- (1) 藤野家は江戸中期に蝦夷(北海道)に進出した近江商人が祖で、根室からオホーツク海沿岸の場所請負人・漁場持ちの家系であった。「戸田論文」によれば、7 代目藤野四郎兵衛良久は漁場で獲れた鮭鱒を優先的に缶詰所に納めていたという。なお、缶詰所の払い下げを受けたのは 7 代目の次男、藤野辰次郎であり、明治末からの需要増大に伴う事業規模の拡大に携わった。
- (2) 当時標津にも缶詰工場を所有していた新家寛造が、地場産のホッキやホタテを主原料とする缶詰を製造するため藤野別海缶詰所を引き継いだ。
- (3) 藤野産業株式会社と別海村との間に賃貸契約が交わされた経緯については、別海中学校の『学校沿革史』に詳しい。この綴りには「貸借契約」の文書の他、契約時点の建築規模や改築予定の間取りなどが描かれた薄紙も一緒に綴じられており、同文書綴は中学校転用時の様子を示すものとして貴重な資料と言える。また、上記契約内容には、賃貸料を無料とする条項や、新校舎が完成するまで賃貸を可能とする文言が含まれ、当時の状況を窺い知ることができる。

2. 建築概要

2-1. 各時代における建築概要の変遷

旧開拓使別海缶詰所は、創建来幾度かの増改築や減築、改修などを経て大きくその様相を変えてきた。そこで本章では、同缶詰所の建築概要について前述の「沿革」の章で示した用途の変遷にあわせ、缶詰所時代、中学校々舎時代、漁協倉庫時代の3つの時代に分け、以下にその建築概要を述べることにする。なお、建築規模の変遷を示す図版を末尾の「図面資料 旧開拓使別海缶詰所 01」にまとめた。

(1) 缶詰所時代

竣工当初の建築概要を知る手がかりとしては、1878(明治11)年4月に「罐詰類集」として取り纏められた文書中にある建築予定図、「出来方建繪圖」(図1)と「罐詰器械所地繪圖」(図2)、同年7月22日の開所式に撮影された写真、「開所式の景」(図3)がある。また、缶詰所の規模や配置を示す資料に、明治10年代に描かれた「別海罐詰所」(図4)や「別海罐詰所圖」(図5)などがある。

まず缶詰所の敷地は図4、5によると東西に流れる西別川左岸に位置し、西別川に流れ込む支流を境として、東側に製造場(今回の調査対象としている旧開拓使別海缶詰所)、西側に所員らが起居する生徒舎が配されているのが分かる。製造場の周りには鍛冶場や倉庫、井戸など、缶詰の製造に必要な諸施設が建てられている。製造場の平面形は凹字形で南(西別川)側に開いている。製造場の西側には倉庫が棟を並べて建ち、鍛冶場は凹部に納まり、井戸は製造場東側に配されている。

製造場の構造種別は木造で屋根は切妻造、西側の棟を2階建とする他は平家とする。以後、便宜上、西側の棟を西棟、東側の棟を東棟、西棟と東棟を繋ぐ中央部を中央棟として記述する(図5)。

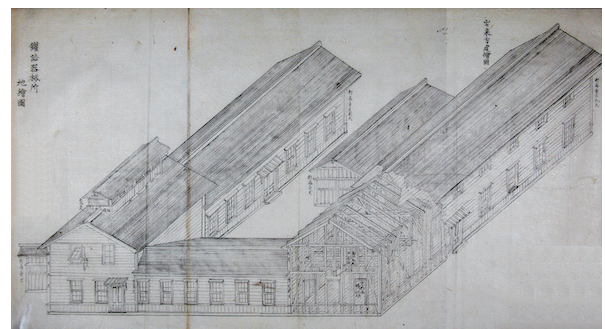


図1「出来方建繪圖」1878(明治11)年4月

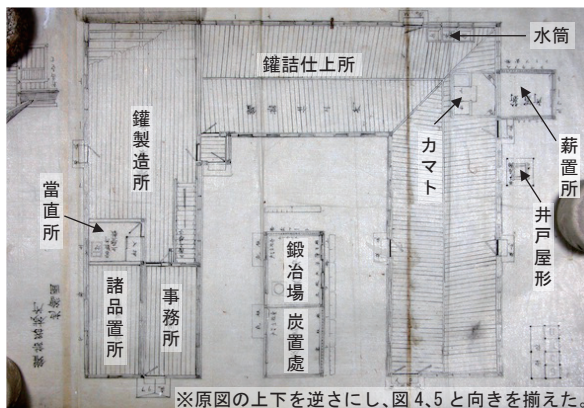


図2「罐詰器械所地繪圖」1878(明治11)年4月(ゴシック文字を加筆)



図3「開所式の景」(北側外観)1878(明治11)年7月22日

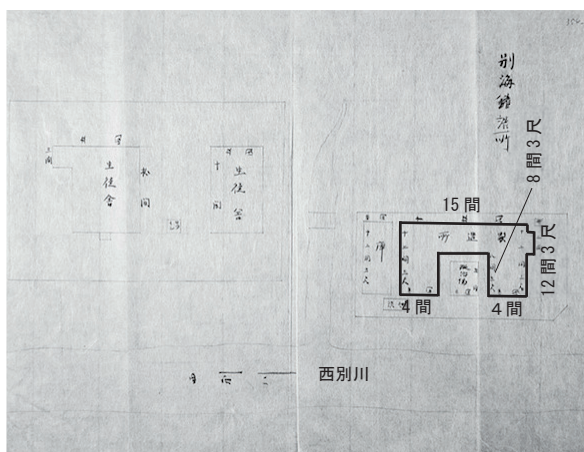


図4「別海罐詰所」1881(明治14)年頃(ゴシック文字と太実線を加筆)

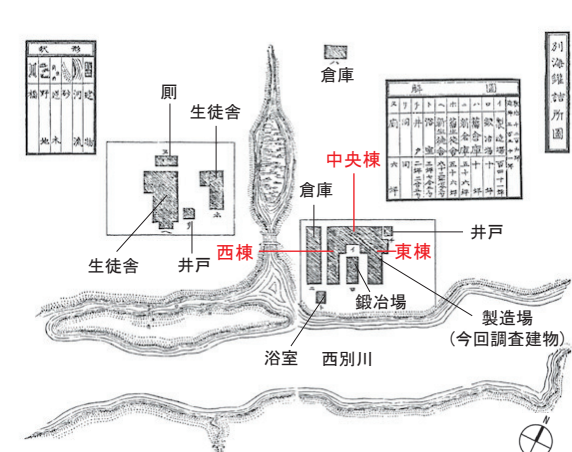



図5「別海罐詰所圖」1885(明治18)年(ゴシック文字と方位を加筆)

「開所式の景」(図3)によると外壁は腰を堅板張り、その他を下見板張りとし、開口部は一部を除き小庇付きの上げ下げ窓、東棟の屋根上部には「カマト」の位置に煙出しが設けられている。各開口部の位置や形式、形状は「出来方建繪圖」(図1)と一致しており、製造場は構造規模や意匠を含め、ほぼ予定図通りに建設されたものと推察できる。東棟は平家ながら、缶詰を煮沸する部分の軒高を2階建の西棟と揃えている。これにより、北側正面の外観はシンメトリーな形となり、建物全体が機能的にも意匠的にも非常にバランスの取れたものとなっている。



別海中学校々舎へ改修する直前の製造場の平面規模は、別海中学校『学校沿革史』所収の「第壱図 藤野産業株式會社別海工場平面図 昭和二二・一〇・一」(図 8)により判断できる。平面形状は西棟と中央棟からなる逆 L 字形で、西棟が梁間 4 間の桁行 12.5 間、中央棟が梁間 4 間の桁行 7 間あり、これらの部分は開拓使時代と規模は変わらない。一方、中央棟北側に増築された下屋は、梁間 1.5

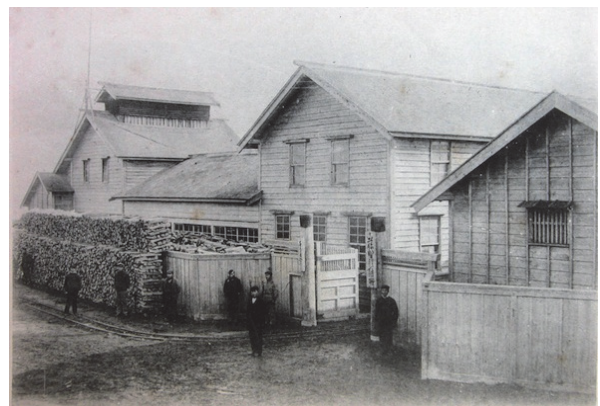


図6「別海藤野鑑詰所外影」1903(明治36)年頃



図7 別海藤野缶詰所北西外觀 年代不明

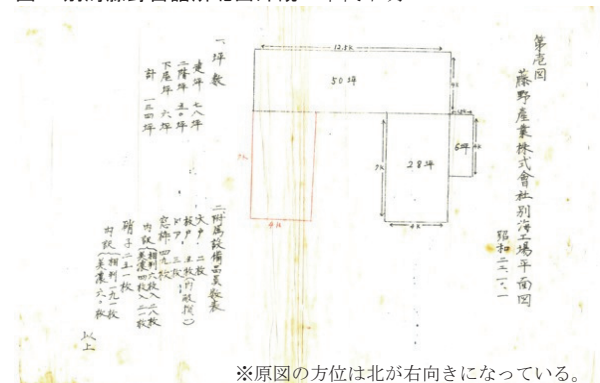


図8「藤野産業株式會社別海工場平面図」1947(昭和22)年

間の桁行4間と図7の時代よりも減ぜられている。東棟は既に解体されており、図には教室棟として増築予定の箇所(梁間4間、桁行7間)が西棟南寄りに朱書きされている。東棟の解体理由については詳ではない。高熱を扱う水回りであったことや海産物を加工する棟であったことなどから腐朽が他所より激しく維持管理に不都合があったのか、あるいは資材の売却に当てたのかもしれない。

(2) 中学校々舎時代

別海中学校々舎時代の建築規模については、前掲『学校沿革史』所収の「第貳図 別海村立別海中学校々舎平面図 昭和二二、一〇、一」を参考にすることができる(図9)。なお、同沿革史によると、工場貸借契約書の署名日が1947(昭和22)年9月27日とある。「第貳図」はその僅か4日後に描かれた間取り図ということになり、さらに改築工事はその4ヵ月後の1948年1月に完了していることから、いかに独立校舎が切望されていたかが分かる。

同図によると、西棟が梁間4間の桁行12.5間で構造規模は変わらず、解体された中央棟の代わりに4坪の玄関、西棟南側に寄せて梁間4間桁行7間の平家建教室棟、そして西棟南側に4.5坪の便所がそれぞれ増築された。間取りは西棟玄関より入り正面に「屋内運動場」、右手に「職員室」と「器具室」、左手は奥へ廊下が伸び、その左に「教室」が、右に「裁縫室兼宿直室」と「湯呑場」が、そして突き当たりに増築便所が配されている。2階は階段を上がると南側に「図書室」と「理科工作室」を寄せ、残りを「講堂」としている。なお、同図には表現されていないが、階段位置は缶詰所時代より変更されており、東平側に寄せられていたものが、向きを変え宿直室横に移設されている(注記5)。

外観は、西棟の切妻造の外形こそ変わりはないが開口部に大きな変化を見せる。上げ下げ窓であった建具類の多くは悉く引違い窓(階高の高い1階では欄間付き)に置き換わるか、壁で塞がれている(図10)。増築された玄関の屋根は半切妻造で棟飾りが付き、教室棟の屋根は切妻造、窓は平側に欄間付きの引違い窓を5組連続させている。昭和30年代にこの校舎に通っていた福原義親氏と瀧口京子氏への聞き取りによれば、2階の「図書室」と「理科工作室」は当時一室にまとめられており、高学年用の教室として使われていたという。昭和30年代に撮影された同教室内部の写真があり、生徒の背後に写る窓と現在の2階南側の窓枠跡の位置と形状がほぼ一致しており、上記証言の確認はとれている

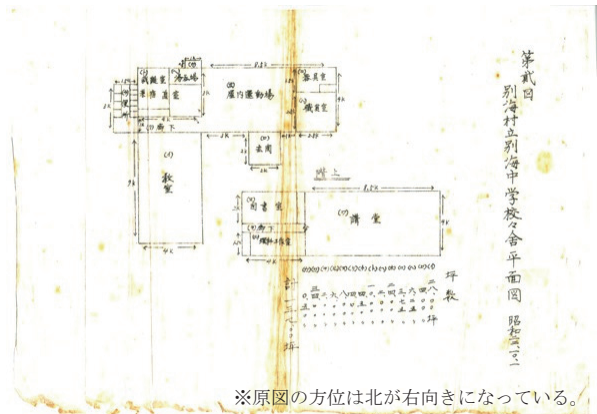


図9 「別海村立別海中学校々舎平面図」1947(昭和22)年



図10 竣工後の別海中学校(部分) 1948(昭和23)年1月

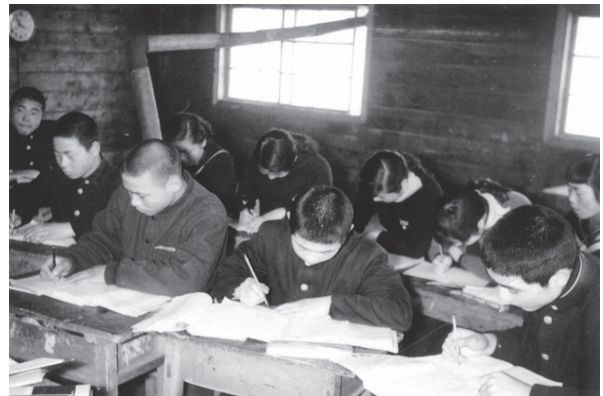


図11 西棟2階教室内部写真 昭和30年代



図12 南東外観(部分) 昭和30年代

(図 11)。同氏らによると、1 階便所や宿直室まわりの間取りも一部変更されていたという。生徒数の増加に伴い改築が行われたものと考えられる。増築便所については、別海漁業協同組合の倉庫となつてからまだ間も無い昭和 30 年代に撮影された写真から、同箇所の外形を確認することができる(図 12)。これによると便所は切妻造で西棟より独立して建ち、渡り廊下によって繋がっているのが分かる。

(3) 漁協倉庫時代

中学校が新校舎へ移転した 1960 年、別海漁業協同組合は同年 9 月に別海村から旧校舎を買取り改築、仮事務所や倉庫としての転用を始める。改築後間も無い昭和 30 年代撮影の外観写真からは、西棟は北側より大幅に減築され、外壁はモルタル仕上げに変更されている様子が分かる(図 13)。また、開口部の数も大幅に減らされ、旧教室棟の北側では、搬出入用の引分け戸と引違い窓がそれぞれ一つずつ、旧西棟についても引分け戸と引違い窓が一つずつ、階を跨いで妻壁中央に配されている。写真右手の地面が周辺より濃く写り込んでいるのは、旧校舎が建っていた名残と考えられる。中央に山積みされた玉石は整地の際に掘り出された基礎の一部であろう。西棟南側に増築された便所は 1969 年以降に撮影された南東からの外観写真にも写っており、改築後暫くの間は遺存していたことが分かる。なおこの時代の間取りについては現在確認することができていない。現在の建築概要は次項に記す。

2-2. 現状

(1) 構造規模

現在の建物の位置は創建当初とは異なり、旧校舎南側にコンクリートの基礎と土間を新設し、曳家で移動させた場所にある(注記 6)。構造規模は木造と鉄骨造の混構造(増築部の 2 階床梁にのみ鉄骨を使用)2 階建て旧西棟の梁間 4 間桁行 6 間に、梁間西側方向へ 3 間分増築した矩形平面をなす(図面資料旧開拓使別海缶詰所 02 参照)。屋根は西棟の切妻造をそのままに、増築部へ架け流す形となっている(図 14)。着色亜鉛鉄板葺きの屋根東側を立平葺き、西側を横平葺きとしているのはこの関係であろう。旧教室棟と中学校時代の便所の解体時期は確認できていないが、旧教室棟の部分が現在の前面道路に掛かっていることから、道路整備の時期か、あるいは曳家の際に解体された可能性がある。旧西棟部



図 13 改築後の北西外観(部分) 昭和 30 年代



図 14 北東外観



図 15 南東外観



図 16 南東隅柱部分 (右：同出隅下部より撮影)

分の軒高は実測値で凡そ 5,480mm で、前掲「出来方建繪圖」に記載されている「軒高 壹丈九尺」(約 5,757mm)に比べ 300mm 程低くなっている。これは曳家の上、現在の土間コンクリートへ変更したこと
に原因があると考えられる。

(2) 外観

外壁はモルタル仕上げから金属系のサイディングボードとなり、開口部については、窓はアルミサッシへ、搬出入口はスチールシャッターに変更されている。かつて旧教室棟と繋がっていた箇所には 2 組の引違い窓が横連で新設され、2 階の引違い窓は其々開口高が狭められた。そのうち南側にあった 2 組の窓のうち西寄りの窓が塞がれた(図 15)。増築部は旧西棟と同一の意匠を持ち、適所に開口部を設ける。なお、旧西棟南側隅柱 2 本にあたる箇所で外壁に凸部が見られる。今後外壁を修繕する際に詳細な納まりを確認する必要がある(図 16)。

(3) 内観

旧西棟、および増築部はともに北側中央に設けられた搬出入用のスチールシャッターが出入口を兼ねている。旧西棟は内部に入ると 1、2 階とも間仕切の無い 1 室空間で、増築部とは 1 階中程にある引戸で繋がっている(図 17)。1 階の梁間中程、出入口より桁行方向 2 間の位置に柱(複数枚の板を組み合わせ外寸 180mm×233mm の角柱を構成)があり、上部に 2 階床組を受ける桁が載る。この桁のシャッター側端部は、同開口高さを確保するため一部切り欠かれ、胴差へは羽子板ボルトで補強の上固定されている(図 18)。内壁と天井の仕上げには合板や化粧合板が張られ、倉庫改築前の状況は不明。階段位置は旧西棟東寄りに移り、側桁が南から 4 間目の梁に架かることから缶詰所時代の位置にはほぼ戻ったものと考えられる(図 19)。旧西棟 2 階の内壁は、減築された北側妻面と増築側平面に合板が張られる他は、中学校々舎時代の面影が残っている(図 20)。また、南壁面には当時の窓額縁が残り(図 21)、床板にある四角い切り込みは校舎時代の階段位置の可能性を示している(図 22)。小屋組はバルーン・フレーム構造に似た形状に陸梁と束を付したような特殊な形をしている(図 23)。合掌や垂木を構成している部材は成が大きく幅の小さい厚板状の断面が特徴で、その他小屋組は繋ぎ材と斜材、火打梁で補強されている。斜材と火打梁は所々根本から切断されているが、切断時期は不明(図 24)。増築棟の内



図 17 搬出入口付近より見た内観



図 18 搬出入口の高さに合わせて削がれた桁端部



図 19 搬出入口付近より見た階段



図 20 壁面に残るクラスの班名を記した貼り紙



図 21 南妻面に残る中学校々舎時代の窓枠



図 22 床に残る切り込み跡



図 23 小屋組



図 24 陸梁に残る火打梁の痕跡

部は 1 階北側から入って左手奥に断熱材で囲われた小部屋がある他は全て 1 室空間となっている。2 階へ上がる階段は無く、2 階床に空けられた開口に、必要に応じて梯子をかけて昇降する。

(4) 保存状態

以上より旧開拓使別海缶詰所時代の遺構は、平面規模で表現すれば旧西棟は西別川に面する南端より 6 間分の箇所となる(図 25)。以下、各部位の状況を記す。

土台については、一部扉などの開口部を通して状況を確認することができるが、基礎まわりを改修して曳家をしていること、腐朽しやすい箇所であることから、当初材であるかの判断は慎重を要する(図 26)。現在の土間梁間中央にある柱の位置は、缶詰所時代の「事務所」北西隅の柱の位置とほぼ一致する。ただし、今回の調査では補強材に隠れた芯材の状況は確認することが出来なかった(この柱がかつて壁の一部であったのならば何らかの痕跡が残っているはずである)。その柱に載る桁や小屋組については、前掲「出来方建繪圖」(図 27)にある軸組に共通点が多く、小屋材に「罐詰所」の印があるということからも当初材である可能性は高い(注記 7)。2 階内壁と床は「(3)内観」の項で示した通

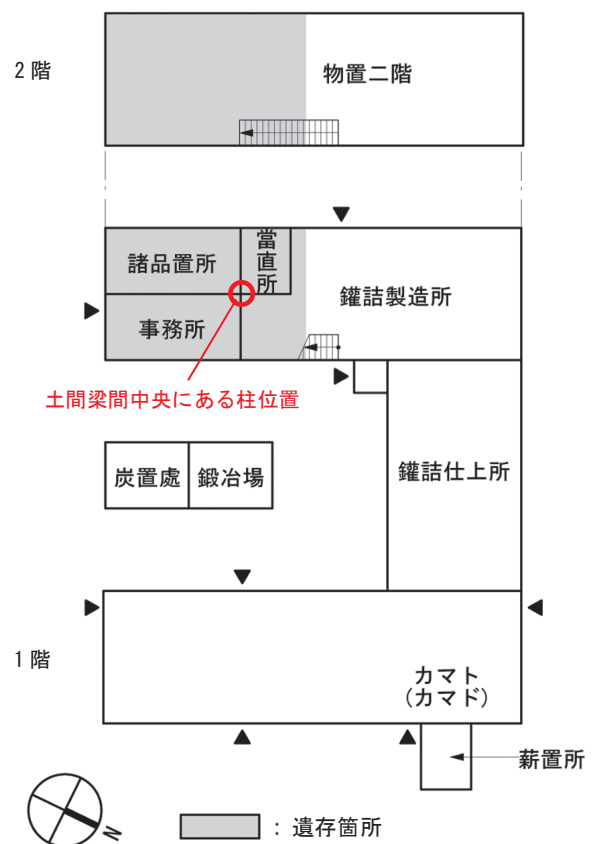


図 25 遺存箇所の想像図
(間取りは「罐詰器械所地繪圖」をもとに作成)

り、中学校々舎時代のものであることは確かだが、缶詰所時代まで遡れるかどうかの確証は現在得られていない。2 階階段脇の壁には縦長の矩形をした切り込みがあり、缶詰所時代の上げ下げ窓の位置を示す可能性がある。これは今後の修理工事などの際に、壁内を調査(窓台等の有無)することで明らかになるだろう(図 28)。増築部の 2 階内部からは、旧西棟の軒先を確認することができる(図 29)。垂木の幅と間隔は、実測値でそれぞれ 45mm と 600mm あり、これらは旧西棟内部の値と一致する。このため増築部の内部から見える西棟の軒は、当初材である可能性は十分ある。しかしこれも屋根の修理時期を待つなど、その判断は他の部位と同様に慎重でありたい。

内部の保存状況全般については、野地板や小屋組に一部雨漏りの痕跡や破損・欠損が見られるものの、屋根は増築時に新しく葺き替えられており、外壁はサイディングボードにより保護されているため、概ね健全な状態を保っていると言える。

注記

- (3)「鐘詰器械所地繪圖」(図 2)には西棟桁行が 75ft (約 22,860mm)、各棟合わせた東西の長さが 90 ft (約 27,432mm)と記載されている。「別海鐘詰所」(図 4)に照らし合わせると、西棟桁行が 12 間 3 尺(約 22,749mm)、東西の長さが 15 間(約 27,300mm)とほぼ同規模であることが分かる。「鐘詰器械所地繪圖」の長さの単位に ft(原本ではフート)が用いられている理由について「戸田論文」は、缶詰所設置の指導的立場にあったトリートが缶詰所設計にあたってオレゴン州コロンビア河畔の魚肉缶詰所に倣って計画した可能性を指摘している。
- (4)「戸田論文」によれば、開拓使別海缶詰所創業時は、缶詰の認知度の低さや価格が高価であることなどが影響して需要は低迷していたという。しかし、1885(明治 18)年から 1889 年までのフランスからの注文、以降の日本陸海軍からの注文、兵士らの郷里への伝播等により、缶詰への需要は徐々に増えていったとある。
- (5) 福原義親氏と瀧口京子氏への聞き取り、および 2 階床の痕跡による。
- (6) 戸田博史氏からのご教示による。
- (7) [写 3: 小屋材の「鐘詰所」印]、北海道教育委員会『北海道の近代化遺産 -近代化遺産総合調査報告書-』(1995 年 3 月)、p. 80。



図 26 旧西棟と増築部の連絡口に見る土台

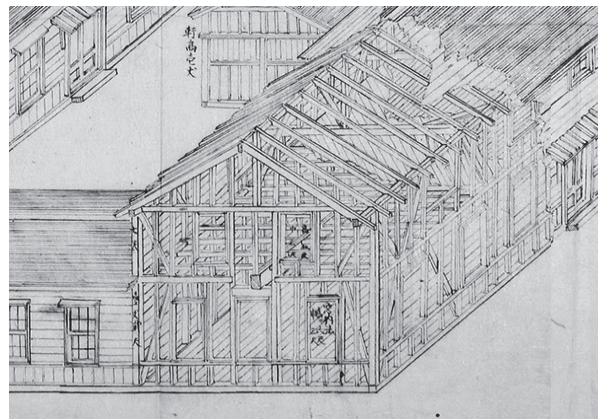


図 27 「出来方建繪圖」(図 1 の部分拡大図)



図 28 2 階階段脇に見る壁面の切り込み跡



図 29 増築部より見る旧西棟の軒先

3. まとめ

以上、旧開拓使別海缶詰所の沿革と建築概要について述べてきた。製造場の遺残箇所は西棟の一部であり、そこはかつて事務や製缶、製品の保管などが行われていた棟であった。今回の調査では改めて改築の痕跡を確認し、古写真や文書資料、聞き取りなどから、建築規模の変遷を追うことができた。度重なる改築、用途変更を経て建築規模は創建時の3割程となり、内観、外観、ともに大きく様変わりをした。しかし、小屋組は創建当初の姿をよく留めているものと考えられ、特にこの小屋組については、フレーム構造に梁や束などを付す特異な形態を示す。これは開拓使における小屋組の発展過程を知る上で貴重な手がかりと成り得るだろう。

旧開拓使別海缶詰所は、開拓使が北海道内に設置した数ある缶詰所の中で唯一現存する遺構であり、貴重な産業遺産として位置付けられている。それだけではなく、同建築には別海町における戦後の学校教育を支えた十数年間の歴史と記憶がある。校舎としての役割を終えた後は、別海漁業協同組合の倉庫として生まれ変わり、再び漁業と関わりの深い活用が続いている。このような一連の歴史そのものが、多くの躯体が失われつつも建築の存在価値を高めている所以である。

参考文献

- (1) 戸田博史「★開拓使別海缶詰所」(北海道大学大学文書館年報, 3, pp. 43-87, 2008)
- (2) 別海中学校『学校沿革史』(発行年不詳、昭和55年6月12日までの記述がある)
- (3) 別海町ホームページ
https://betsukai.jp/kyoiku/culture/bunkazai/rekishi_isan/kaitaku_kanndume/

図版出典

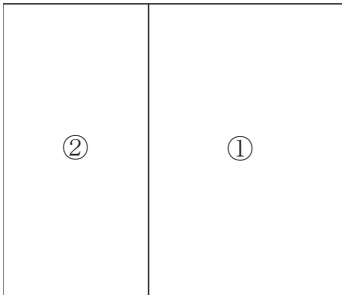
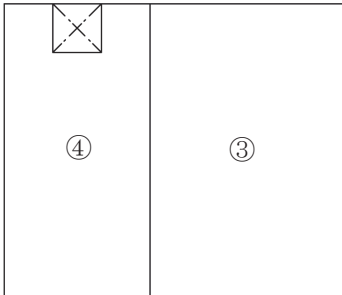
- 図1 「鐘詰類集 明治十一年四月六月」(簿書2991)北海道立文書館蔵 ※(47)
- 図2 「鐘詰類集 明治十一年四月六月」(簿書2991)北海道立文書館蔵 (戸田博史氏より提供)
- 図3 北海道大学附属図書館蔵 ※(45)
- 図4 北海道大学附属図書館蔵 ※(48)
- 図5 『開拓使事業報告第三編』1885(明治18)年、北海道出版期企画センター復刻版 ※(48)
- 図6 『藤野缶詰所事蹟一覧』1903(明治36)年、北海道立図書館蔵 ※(59)
- 図7 福原義親氏蔵
- 図8 『学校沿革史』別海中学校
- 図9 『学校沿革史』別海中学校
- 図10 福原義親氏蔵
- 図11 福原義親氏蔵
- 図12 福原義親氏蔵
- 図13 福原義親氏蔵
- 図14～24、26、28、29 撮影：西澤岳夫 撮影年月日 2022年8月22日～8月25日
- 図25 前掲「鐘詰器械所地繪圖」(戸田博史氏より提供)をもとに作成
- 図27 「鐘詰類集 明治十一年四月六月」(簿書2991)北海道立文書館蔵 ※(47)

※印は戸田博史「★開拓使別海缶詰所」(北海道大学大学文書館年報, 3, 2008)からの転載であり、()内の数字は当該図版の掲載ページ数を示す。

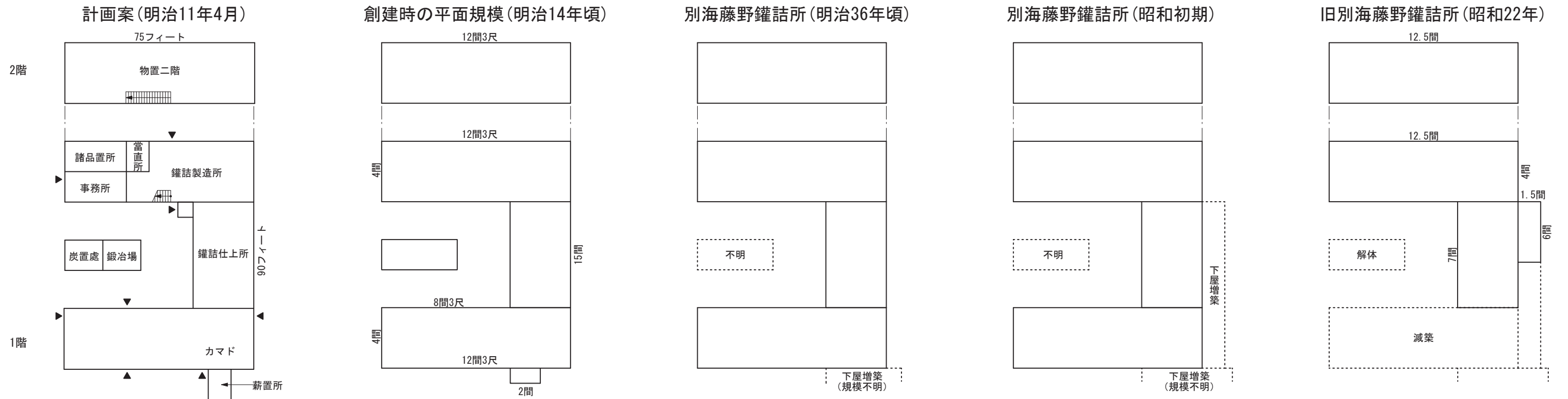
図面資料 旧開拓使別海缶詰所

- 01 平面規模の変遷 (縮尺 1/500)
- 02 平面図 (縮尺 1/100)
- 03 断面図 (縮尺 1/100)
- 04 立面図 1 (縮尺 1/100)
- 05 立面図 2 (縮尺 1/100)
- 06 小屋組図 (縮尺 1/50)

面積表

<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>1 階</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>2 階</p> </div> </div>			
		計算式 単位: mm	面積 単位: m ²
①	主屋(旧西棟)1 階	$10,920 \times 7,280$	79.49
②	増築部 1 階	$10,920 \times 5,460$	59.62
③	主屋(旧西棟)2 階	$10,920 \times 7,280$	79.49
④	増築部 2 階	$10,920 \times 5,460 - 1,820 \times 1,820$	56.31
	建築面積	①+②	139.11
	1 階床面積	①+②	139.11
	2 階床面積	③+④	135.80
	延べ床面積	①+②+③+④	274.91

缶詰所時代



「罐詰機械所 地繪圖」(「罐詰類集 明治十一年四月六月」(簿書291)北海道立文書館蔵)をもとに作成。平面規模の表記には「フート」(フィート)が用いられていた。

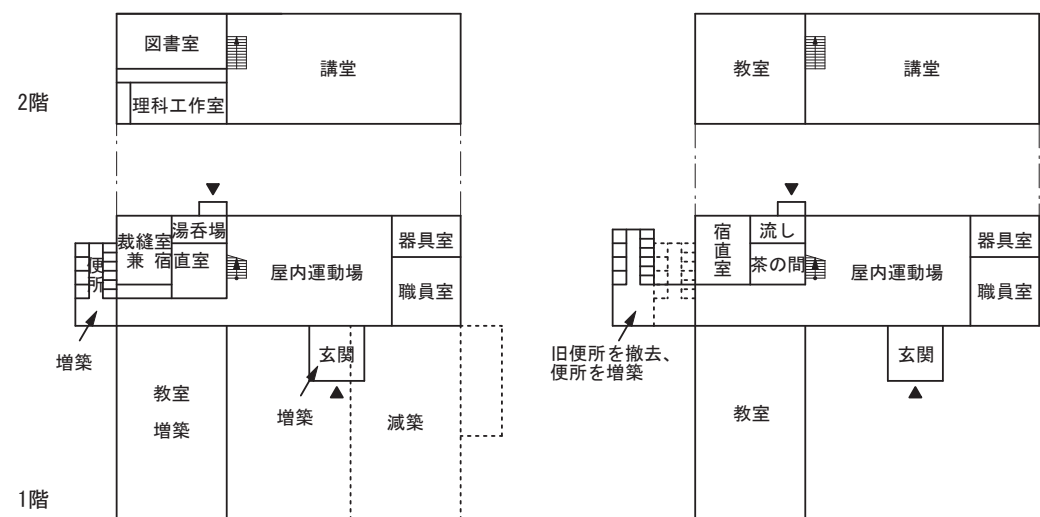
1881(明治14)年頃の「別海罐詰所」配置図(北海道大学附属図書館蔵)をもとに作成。内部の間取りは不明だが、規模や平面形状が略同じであることから、計画案と同様の建築であったと推測できる。規模の表記は間・尺。

「別海藤野罐詰所外影」(『藤野缶詰所事蹟一覧』1903(明治36)年(北海道立図書館蔵))を見ると、正面外観は開拓使時代とそれほど変わりはないが、北東隅に下屋が増築されている。昭和初期の撮影と推測される写真(前田なを氏所蔵)によると正面中央平家部分に更に下屋の増築が確認できる他、棟木を跨いで設けられていた煙出しが撤去されているのが分かる。破線部分の規模を示す具体的な数値は確認できなかった。鍛冶場、薪置場等の遺残についても不明。

「第壹図 藤野産業株式会社別海工場 平面図 昭和二二.一〇.一」(別海中学校『学校沿革史』)をもとに作成。規模の表記はK(間)。

中学校々舎時代

竣工時の間取り(昭和22年) 後年の間取り(昭和30年代)

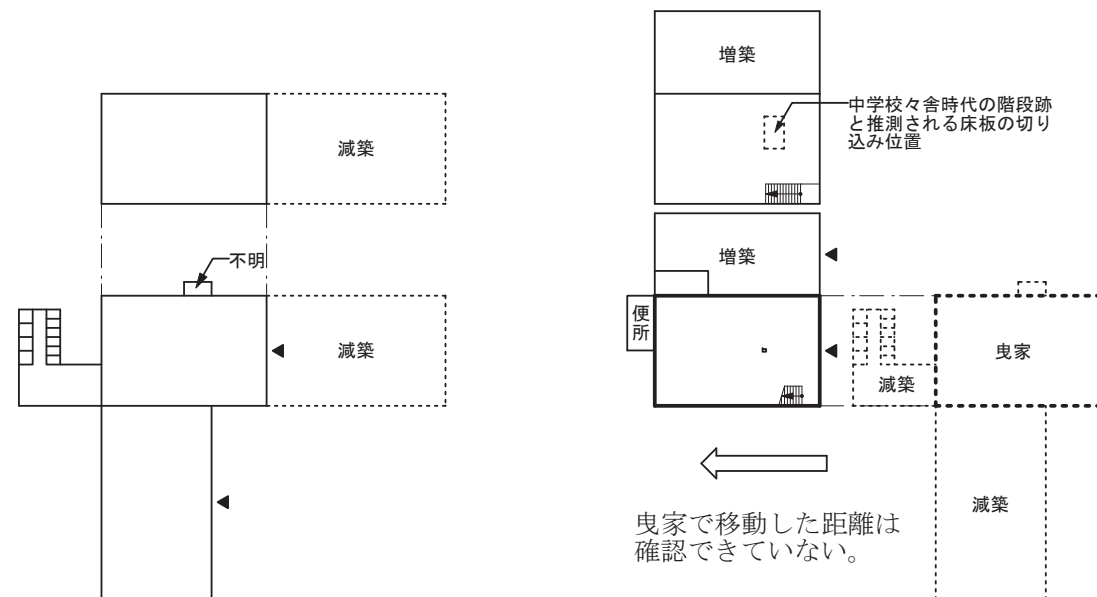


「第貳図 別海村立別海中学校々社平面図 昭和二二.一〇.一」(別海中学校『学校沿革史』)をもとに作成。階段位置は、現存の2階床に見られる痕跡をもとに加筆。

「別海中学校1階平面図」(福原義親氏提供/作図協力:瀧口良一・京子)及び、福原義親氏と瀧口京子氏への聞き取りをもとに作成。

漁協倉庫時代

初期の平面規模(昭和30年代) 現在の平面規模

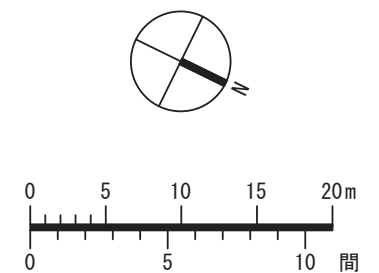


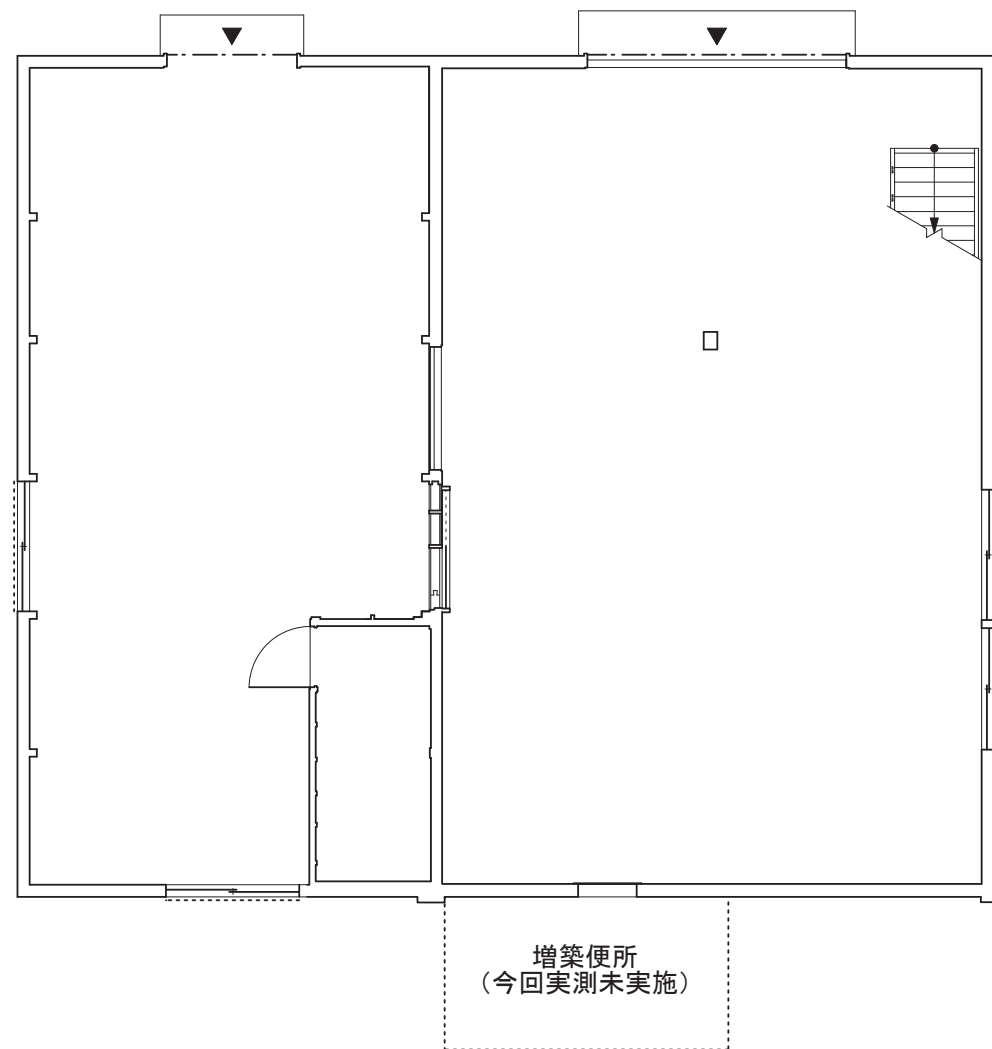
別海漁業協同組合の施設として改修を受けた後の北西外観写真など(福原義親氏提供)により平面規模を判断。間取りは不明。通用口についても写真より確認できなかったため「不明」とした。

令和4年度 日本遺産「「鮭の聖地」の物語〜根室海峡一万年の道程〜」構成文化財調査事業
旧開拓使別海缶詰所、および旧奥行臼駅本屋 実測調査報告書

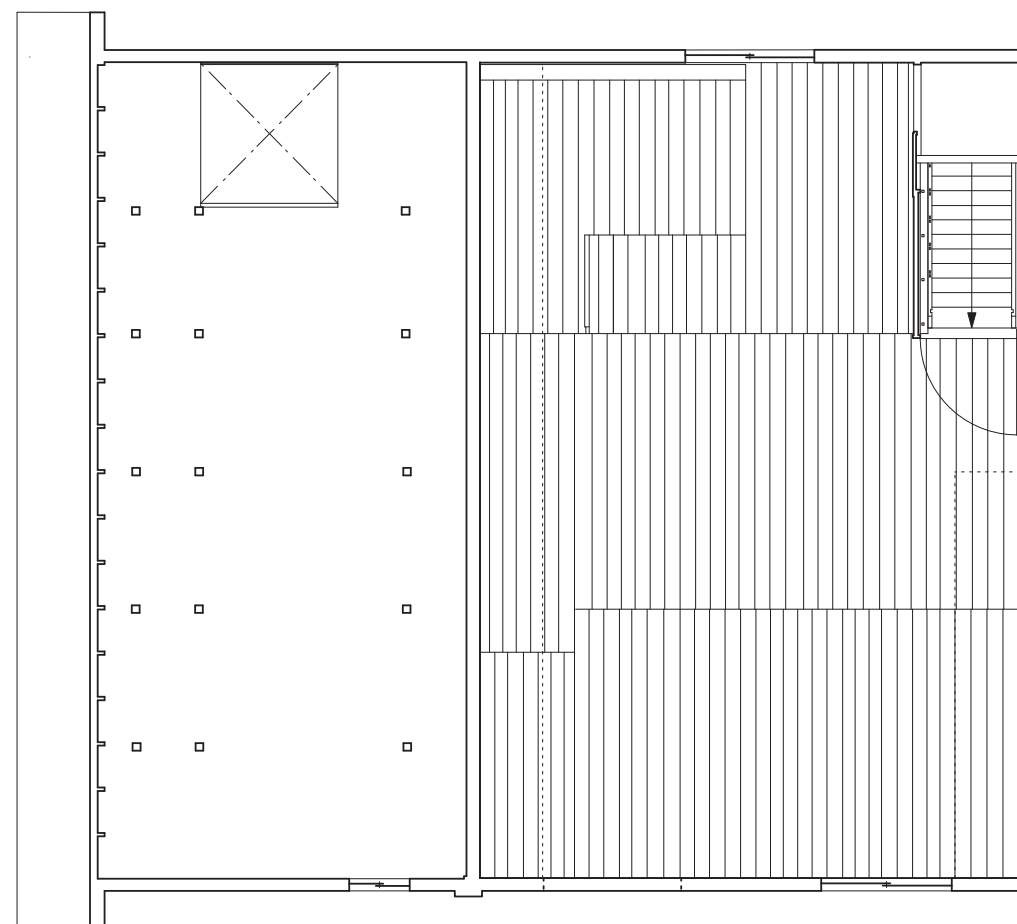
旧開拓使別海缶詰所
平面規模の変遷 1 : 500

釧路工業高等専門学校 建築学分野 (西澤研究室)

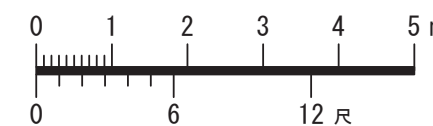




1階平面図



2階平面図



令和4年度 日本遺産 “「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程～” 構成文化財調査事業

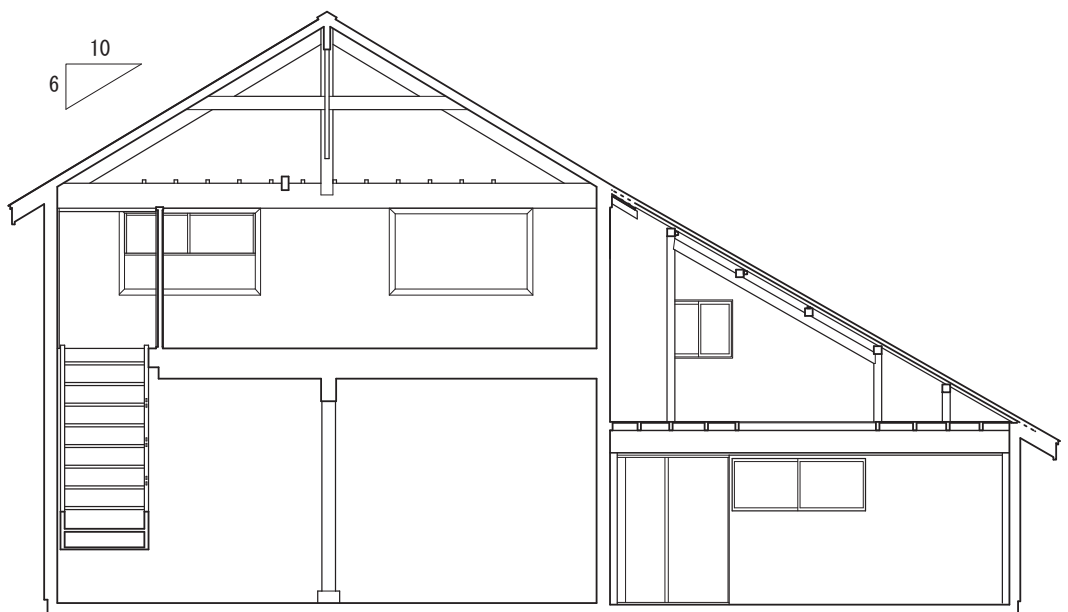
旧開拓使別海缶詰所、および旧奥行臼駅本屋 実測調査報告書

旧開拓使別海缶詰所
平面図

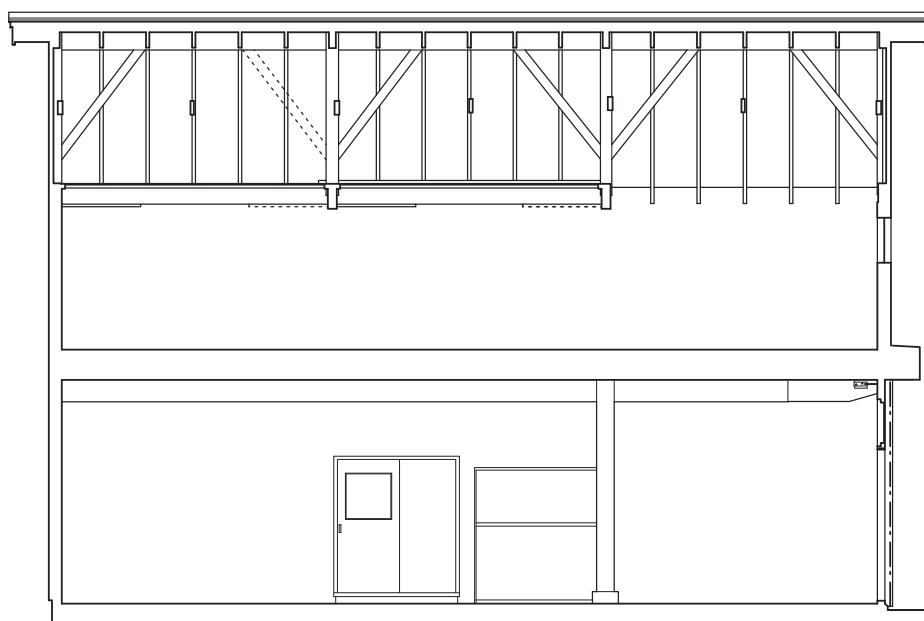
実測図
1 : 100

02

釧路工業高等専門学校 建築学分野（西澤研究室）

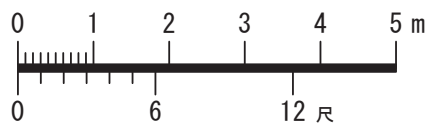


断面図（東西）



※破線表記の斜材と火打梁は痕跡のみ確認

断面図（南北）



令和4年度 日本遺産「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程～ 構成文化財調査事業
旧開拓使別海岱詰所、および旧奥行臼駅本屋 実測調査報告書

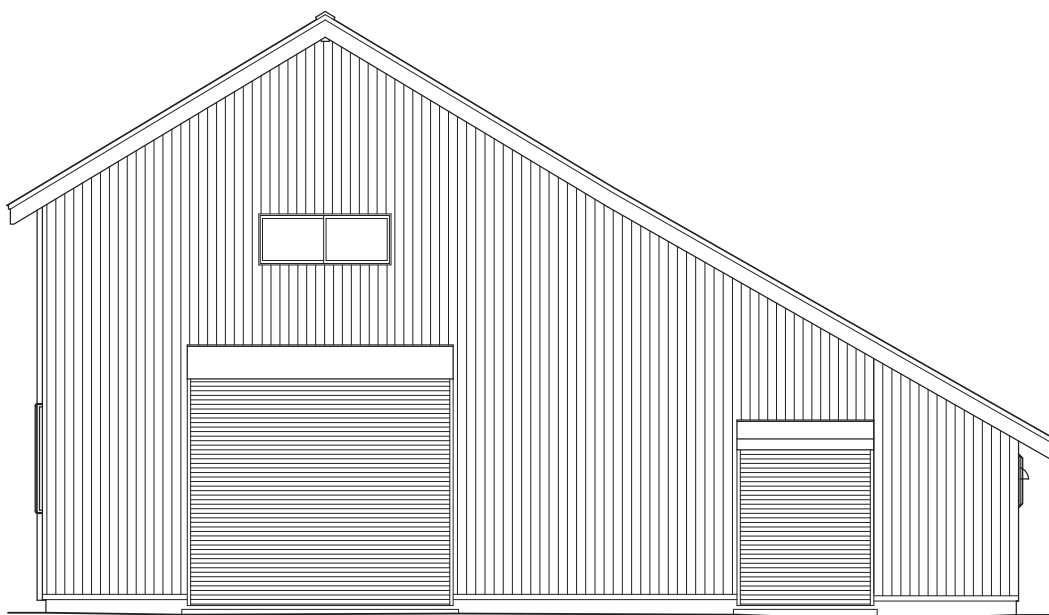
旧開拓使別海岱詰所

実測図

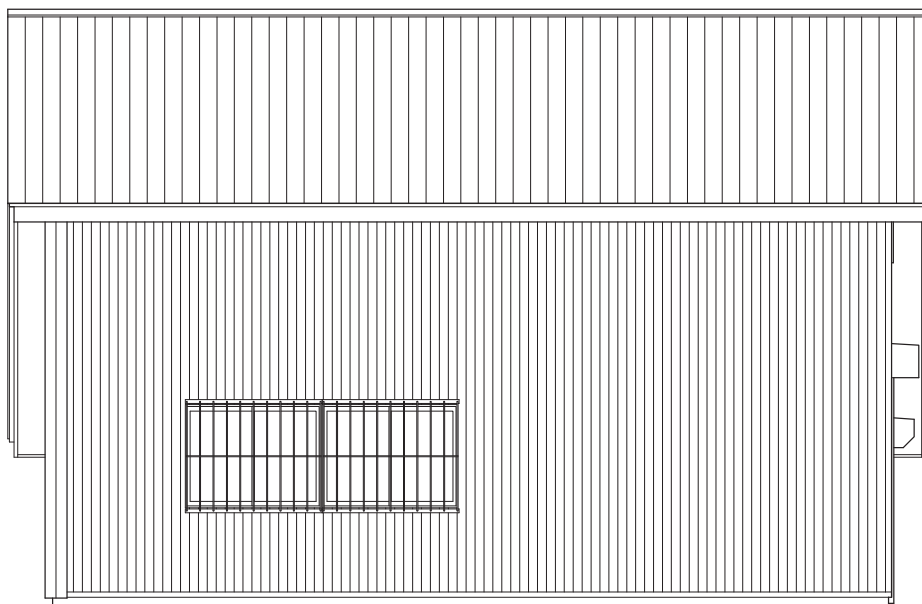
断面図

1 : 100

釧路工業高等専門学校 建築学分野（西澤研究室）



北立面図



東立面図

令和4年度 日本遺産「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程～ 構成文化財調査事業
旧開拓使別海缶詰所、および旧奥行臼駅本屋 実測調査報告書

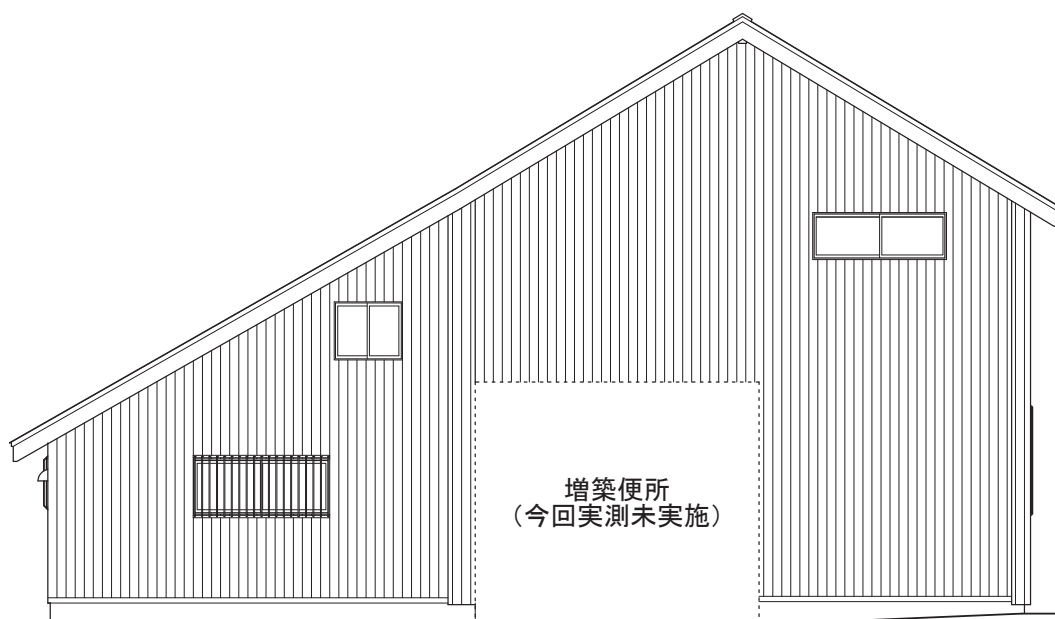
旧開拓使別海缶詰所

実測図

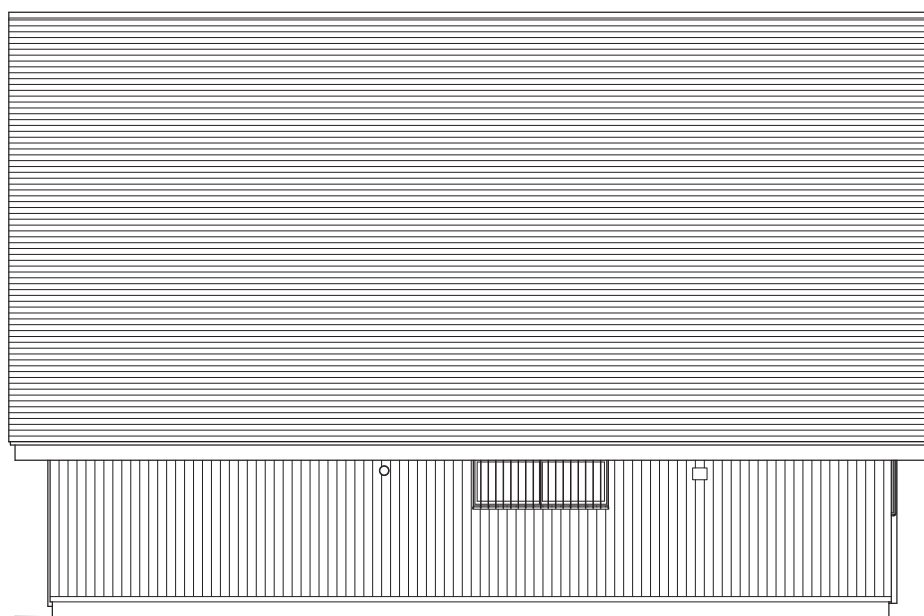
立面図 1

1 : 100

釧路工業高等専門学校 建築学分野（西澤研究室）



南立面図



西立面図

令和4年度 日本遺産「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程～ 構成文化財調査事業
旧開拓使別海缶詰所、および旧奥行臼駅本屋 実測調査報告書

旧開拓使別海缶詰所

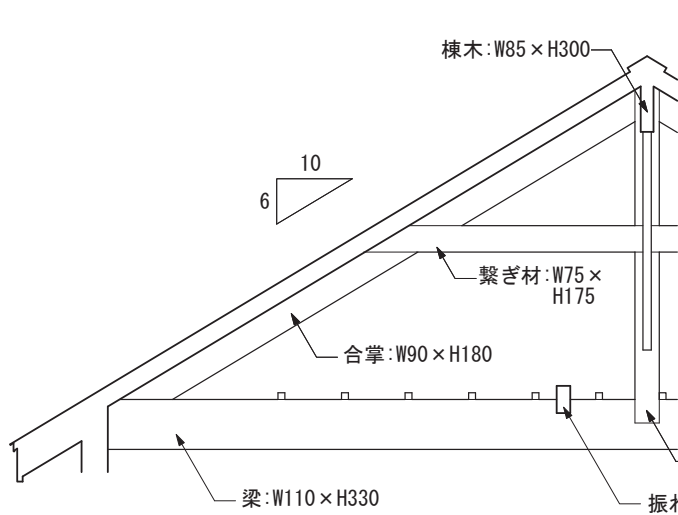
実測図

立面図 2

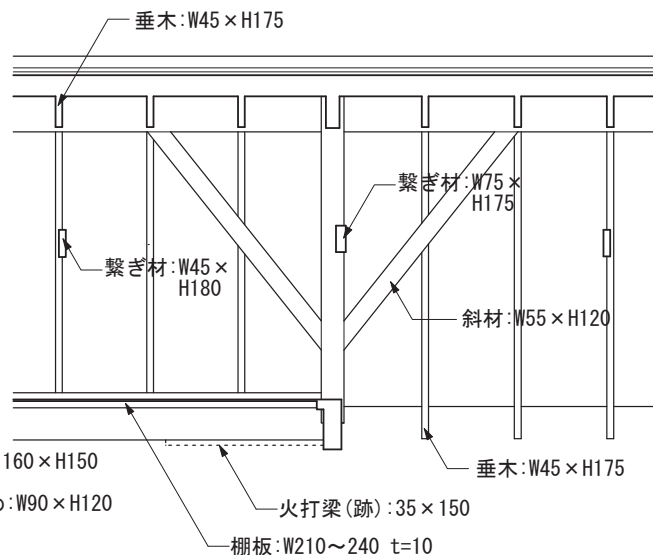
1 : 100

釧路工業高等専門学校 建築学分野（西澤研究室）

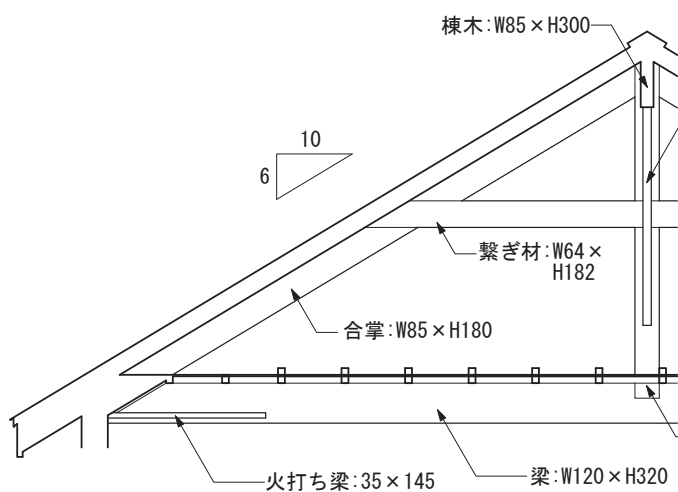
05



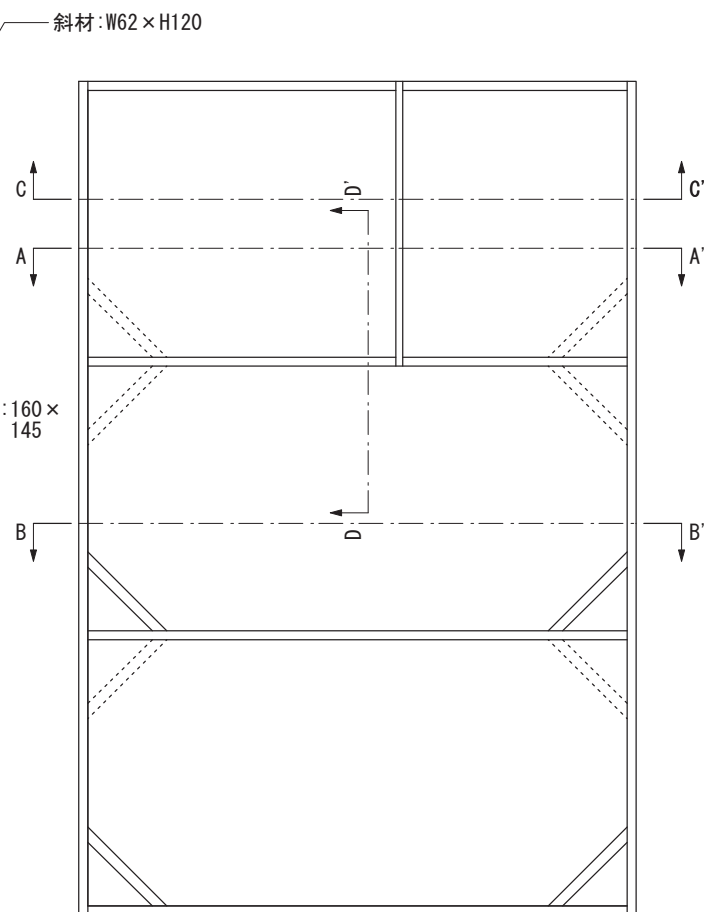
A-A' 断面



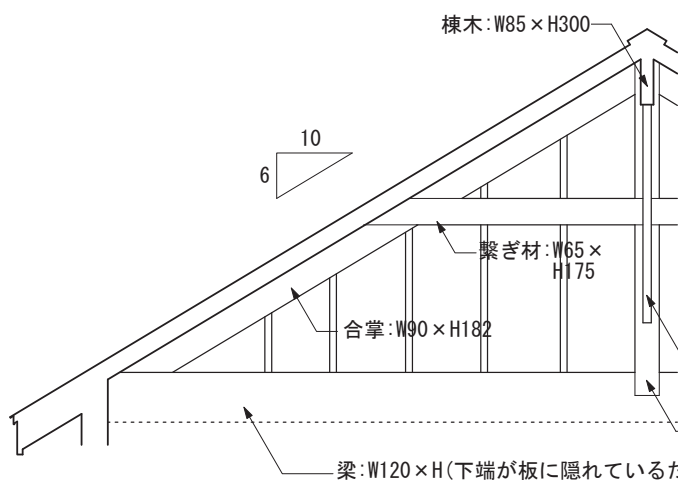
D-D' 断面



B-B' 断面



※破線表記の火打梁は痕跡のみ確認



C-C' 断面



キーププラン



令和4年度 日本遺産「「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程～」構成文化財調査事業
旧開拓使別海岱詰所、および旧奥行臼駅本屋 実測調査報告書

旧開拓使別海岱詰所

実測図

小屋組図

1 : 50

釧路工業高等専門学校 建築学分野（西澤研究室）

06